

●特集・晩年の句境

初心透徹
宮津昭彦

大野林火晩年

大野林火の作品に「晩年」の語がみられるのは、皆晩年冬日黄なるに撮られけり（『雪華』）からである。昭和三十六年作。そして、翌年には、炎天に怒りおさへてまに老うも（同右）がある。そしてこの句の自解の言葉に、「私の句に、さきに「晩年」の語が入り、まに「老う」の語が入るようになった。還暦にはまだ二年余したが、忍び寄る老いをとくに意識するようになった」が見られる。この言葉はさらに続いて、「そのことは私に、三十八年十二月刊の『戦後秀句Ⅰ』のあとがきに（筆者註、この書にとりあげた諸家が）いかにして、老いに対応しているかを学ぶ」ことも課題の一つと書かしている。」となる。

この「あとがき」の言葉は、林火を語る場合、引用されることが多い。これほどはっきりと「老い」を迎える覚悟を語った俳人はまだからであろう。六十を「老い」の入口と見定め、その奥につづく歳月をどのように生きるか、晩年意識がひとつの問題として強く自覚された時代だった。

（『雪華』）

還暦の近しや月夜葉が落つる
鯖漁る火命惜しめと沖に殖ゆ
老いゆくを知れとて長き夜はあるか
期すものに老後も初心水澄めり
いづれも還暦前後の作だが、その経緯が影を濃く落として
いる。

この強烈な晩年意識のなかで作句活動はいよいよ充実し、『雪華』の「あとがき」には、「この句集、後半ややわが道を得た」の語をとどめさせている。「わが道を得た」ことを如実に語る作として、ここではつぎの一句をあげておきたい。

花はつほつ夢見のさくらしだけけり（『雪華』）

この句には、「さくら本坊主、庭前の桜につき、吉野宮に在りし大海人皇子夢見の故事を説く。事は問はず、ただそのさくら美しければ」の前書があるが、後半の部分と一句が照応して眼前の桜に限りなく情をそそぎ、桜とひとつになつて
いる林火の姿が髣髴とする。それは抒情の抒情たるゆえんを

啓示する姿であるとともに、あらためて自らの稟質に納得している姿である。さきに触れた『戦後秀句』で、水原秋桜子がその本来の道である「美しくて而も力の充ちた句」を詠みつけたことを念じて『重陽』から『霜林』へと作風の転換をはかったことを、戦後という時代を背景に置けば「己れを知る勇氣と決断をこそ、いま容易ならぬものとして考えている」と共感をこめて書いている林火の姿もここに重なる。「己れを知る勇氣と決断」をそのまま林火自身にあてはめてみれば、そこに「わが道を得た」姿があらわれてくるからである。それは、自ら言う「老後初心」を探り得た姿でもある。その確信の上に、つづく『潺湲集』のみずみずしさがあられ、年中行事の探究に老い難き精神の発露をもとめて「卯月八日」「青花摘」などの季題を掘り起こした『飛花集』の世界がある。

そのような林火の歩みは、「いかに老いるかの問題は、若い者が人生いかに生くべきかを問うのと同じ」という当時の林火の言葉であらためて納得させるものがあり、俳句と人生について教えるところを多く藏している。それゆえにあの「あとがき」の言葉がひとつの感銘をもつて多く引用されるところともなるのであろう。

しかし作家である以上、ひとつとところにとどまることは許されない。「昨日の吾れに飽く」ことは、また林火が常時説いたところでもあった。

雪が皆隔つ老ゆまじく老ゆまじく（『潺湲集』）

晩年や籠りて雪の日もまじり（『飛花集』）
前句は昭和四十三年、後句は四十四年作。いずれも老いにかかわるが、後年林火はそれぞれにつきぎのような自註を付している。「老いの意識はこのころに強く、却つていまは薄い。老いが兆した頃だからだ。」また、「前にも書いたがこの頃晩年意識が強い。『いかに老いるか』が頭に冠さっていたからだろう。——こういう自註を読むと、林火は自分を偽らないう作家だということを改めて知るのだが、すでににつきぎの境地に脱け出ていることも教えている。この自註が書かれたのは昭和五十三年。第十句集『方円集』のさいごの年次である。このあたりから遺句集となった『月魄集』に焦点をあてて晩年の句境を探るのが妥当であろう。

『方円集』から『月魄集』へかけて「咳」の句が多いことにまず気づく。

咳訴へ老人ですからと云はれ帰る（『方円集』）
老林火 咳止め飴を離さずに（『月魄集』）

咳終へて遙かな國に來し思ひ
死ぬるときもこの咳夏も咳きにけり

手紙の端に

咳なき日霞の國にゐるごとし

風稿を求められて

能なしのあはれは咳を訴へぬ

咳はこの時期の林火を悩ますものの最たるものであり、

「死ぬるときも」のように咳を通して死を見つめるときもあった。しかし咳の苦痛を訴えるというよりも、咳をかりて自画像を描いているという趣がこれらには濃い。そこに晩年意識をはるかに越えて淡淡とした老境に至った姿を覚えさせるものがある。そして前掲句のなかの「咳なき日」などは、読む者を霞の國に誘つてときに遊ぶといったおらかささえ見せる。老境のゆたかさに思い及ぶ句だが、その老境は、また、

数へ日の塀の日当るひとところ（『月魄集』）

冬籠雲多きみちのくより戻り

一汁一菜葉を落す木のふえてゆく

塀の外世の移りをり落の臺

平凡を噛みしめてゐる端居かな

と、日常の場に沁みわたるしみじみとした感懷となつてあらわれてもいる。これらは老境のしずけさを伝える句といつてよいであろう。

そういうしずかな老境のなかで見つめられているものに「死」がある。

しぐれ恋ふ死を急ぐごと旅つづけ（『月魄集』）

いのち長きより全きをねがふ寒
年毎に死に近づきてさくら見る

松崎鉄之介は、晩年の林火は「如何に死ぬるか」へ心を澄ませていたと言う。私も中野好夫の『人間の死にかた』がしばらく林火の座右にあったことを憶えている。しかし、林火が死についてどのような結論を得ていたか、その消息は作品にたずねるほかならう。そして、その消息を端的に伝える一句が前掲の「いのち長きより全きをねがふ寒」である。この句に「死」の文字はない。しかし死を見つめたところに生まれている句である。この断定のいきさきに林火の面目を強く覚えると同時に、自分を見つめるきびしさを老境にあつてなお失わない姿に改めて畏敬の念を覚える。自分を見つめ

句集

黒鍵

師 名陽子

『弦樂』につづく第二句集。
昭和五十三年から六十年までの
の二百七十八句を収録。
B5判変型豪華箱入り
定価二千円 送料四五〇円

弦 樂 社

〒190
東京都立川市柏町3-2-4
電話 0425-37-3317

句集出版のご相談に応じます。ご一報下さい。

ということ、それは第一句集『海門』の「後記」に、「作者はどこまでも自分を追ひつめる以外にはない」と記して以来、俳句に対する林火の姿勢を貫いてきたものでもある。これらの句の「死」もまた自分を偽りなく見つめたことの帰結というべきなのである。

自分を見つめる——そのことが旅にも及んでいることは、水澄むにうつりて過ぎて旅の身ぞ（『万田集』）がよく示している。

旅は林火の生涯の伴侶といってもよく、『白幡南町』の草津、『雪華』から『潺湲集』へかけての信州、『飛花集』の関西とそれぞれの時代に親しんだ土地があった。晩年は、「いま一番行きたいのは東北」と語っているように、しばしばみちのくへ足を運んでいる。

みちのくの腹当だけの女の子（『万田集』）
夜長人伊達さまの湯に居眠れる（『月魄集』）
鳴き過ぐを雁といひ湯に立ちあがる

山日和下界の稲も終りたる

あとの三句は「青根温泉不忘閣」の前書があるが、それぞれ鄙びたみちのくと親しく心を通わせているさまがうかがえる。みちのくと溶け合っているといってもよからう。「——自分が景色にとけこんで、一つになってゆく、いままで対立関係で見ていたのが、景色のなかに自分が入って、景色に包まれて詠ってゆく、そう行つてほしい」は、「浜」同人杉本寛への言葉だが、それはまた林火が旅にねがった境地でもあ

った。

その境地がすすむと、旅吟も日常吟もひとつの大きな呼吸につつまこまれて林火のものになってしまふ。そういう例をあげることは容易であろう。いまは訪中時の二作にとどめてながめてみたい。

日焼顔 働く艶を加へたる（『月魄集』）
着ぶくれてぶつかりあうて朋の國

前句は第一回、後句は第二回、それぞれ訪中時の作だが、いずれも異国にあって風物に心奪われることなく、心の深いところで隣邦を受けとめ理解していることを教える。

林氏袁氏花の始終を嘉せしや（『月魄集』）
は二度の訪中の間に、林氏、袁鷹両先生を迎えての作だがすぐれた挨拶句である。挨拶の心は相手が人間であると土地であるを問うまい。「——近來、とみに足が衰えた私の行動半径は狭まった。その私は努めてねんごろに人や草木に接することを希求してゐる。ねんごろに接することやさしさ、あたたかさを汲みとろうとねがっている。」は亡くなる前年に書かれた言葉だが、林火晩年の境地をそのまま語っている言葉であり、到り得た境地を語る言葉といえよう。

『潺湲集』の時代の林火は、「虚に居て実に遊ぶ」ことを説き、また、「執して、離れて、遊ぶ」ことを作句の理想として語った。そして芭蕉の言葉の、「飛花落葉の散乱るも、その中にして見とめ聞とめざれば、おさまることなし」の「見とめ聞とめる」ことを作句の根底の大事とした。そして

年齢は、「見とめ聞とめ」たものが日を経て心に蘇ることまでをその範圍に許すようになった。「——若き日はそれを待たずに強引に作句したものだ、いまはその蘇る日を待つようになつた。そうしていくつかの句を得た経験は私は持っている。これを成長というか、衰えというか——の判断は他人に任せる。」（『消えて跡なし』、『浜』56・6）は、林火晩年の句境の自在さを考え、その自在さのよって生まれるゆえんを教える言葉といえよう。

群司野鈴君留てくれる

あかざの杖白きに年を祝ぎにけり（『月魄集』）

枯蔓の仏の姿して吹かれ

夜の山を大きく見せて星流る

藪に集り畦々に散り曼珠沙華

うすらひに紛れて初の白魚は

芦原に絮のあがるは芦を刈る

裸木となりていよいよ巨きな樹

初雪の空をみどりにして解けし

湯気となり白の逃げゆく葛をとく

琵琶を弾く女俑と春を迎ふなり

紙子着て古人の夜につながれり

自らの心を大きく遊ばせて詠い上げた虚に、実もまた自在に応じているさまを思ふのである。

昭和五十七年春、林火は床につき、入院、手術、退院とい

う経緯はあったが、ついに再び起たなかった。

行く雁の曇り深めて消えしかな（『月魄集』）

死仕度子のことに尽く暮春かな

眠らなむ妻来るまでの麗日を

屑入に花屑まじる五月かな

その夜暑し思ひ詰めては死に到る

日々夏樹となりゆくさだかこの世なり

飲食許されて

新茶一滴残る胃に享け生き得たり

五月夜空月あり晝と異ならず

新豆腐一切れに足る餉なりけり

萩明り師のふところに居ることし

『月魄集』に挿入された入院中の林火の句帳の写真版は、飽くことのない推敲のあとをまざまざとどめている。そして、死から目を外らせてはいない。林火が自らのうちに養ってきた自己を見つめるきびしさは、直面する死に強靱に耐えている。

「老境は、そこにいたるまでの年代のその日々をゆるがせにせずに生きて来た者にのみ訪れるもの」と、林火ははやくから自得していた。おそろしいとも言えることである。自己を、そして自分の俳句を見つめるきびしさは、その認識と相まって終焉まで林火の俳生涯を貫くものであったといえよう。生涯を通じての「初心」の大切さをそこに養っていたともいえるのである。